OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動員論的視角からみたエスニシティ諸理論
Author(s)	桜間, 真
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 51-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4037
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

動員論的視角からみたエスニシティ諸理論

桜間　真

〈要旨〉

近代国民国家にとってエスニシティは今や例外的現象ではなく、一定の説明を求められている「近代的」現象である。いわゆる「近代化論」以降、様々な理論がエスニシティの解明のために提唱されてきたが、それらの理論間の関係を明示的に取り上げた研究は少ない。本論文では、K. W. Deutshの「動員（Mobilization）」概念に焦点を当て、近代化論と並んでいわゆる「動員主義的アプローチ」に基づく理論（「民族支配論」と「民族競合論」）の再検討を試みる。その際、分析的に動員概念を「階級的動員」と「エスニックな動員」に分け、それらの動員要素が活性化する過程を明らかにするための分析枠組みを提出する。この分析枠組みに基づいて個々の理論の理論的前提や特性を明らかにしたい。最後に、こうして得られた分析枠組みをもとに、諸理論の相対的な位置づけをおこない、個々の理論をより一般的な枠組みの中で解釈することを可能にする。

キーワード

エスニシティ、動員、発展論、民族支配論、民族競合論、代替と補完

1. 問題設定

近代国民国家においては、ナショナリズムを媒介とした国民形成(Nation Building)により諸「民族」は単一の「国民」へと再編成され、「民族」的属性への執着は減少していくというのが近代化論の社会統合のプランであった。しかしながら、国民国家形成の歴史が長い西欧諸国においても、近代化論の予想に反して、エスニックな政治運動(Ethnic Political Mobilization)が様々な形態で存続していることは周知の通りである。(ベルギーのフランデレン運動、スペインのバスク・カタロニアの分離主義、フランスのブルターニュ民族主義運動など)

本報告では、エスニシティに関する諸学説相互の布置関係を明確にするために、「動員論的視角」に基づいた概念図式の提出を試みる。その上でエスニシティに関する諸理論のうち、「近代化論」とならんで「動員論的アプローチ」と呼ばれる諸理論の代表的な二つの学説(「民族支配論」と「民族競合論」)の検討を行う。エスニシティに関する問題群が多様な広がりを見せている今日、このような一種の「俯瞰図」を作る試みは時期尚早と考える見方もあるだろうが、個別の実証研究の蓄積を活かすためにもこうした試みには意義があると考える。

本論にはいる前に、本論文で考察する範囲に2つの限定を加えておく。第一は、本論文で採り上げるエスニシティに関する学説は「動員論的視角」にたつ学説であり、いわゆる「原初的アプローチ(Geerts, Van den Bergなどの論者によって展開されている)」と呼ばれるエスニシティの原初性(客観性および非合理性)を強調する立場については本稿では取り上げないことである。その理由は、民族紛争ではこうした原初的愛着感自体が政治的に動員されることがしばしば見られること(いわゆる『伝統の創造』と呼ばれる現象)から、エスニシティの「原初性」自体が疑わしいこと。また、人間集団の原初的感情を認めたとしても、なぜある特定の時期に特定の社会にエスニシティの活性化がおこるかという問いに対しては、この立場では説明が困難だからである。

第二は、エスニシティの定義に関わる問題である。Isajiw[1]は人類学・社会学の論文65編を調べてエスニシティの定義の検討を行っているが、明確で一貫した客観的定義付けは実質的に不可能であると結論づけている。このことは通常考えられているように言語・宗教などの文化的様式の個々の項目を共有しているかどうかでエスニック集団を定義づけることはできないということであり、実際は、あるエスニックグループでは(例えば)宗教が共有されているが別のエスニックグループではそうではない、といったケースが大半である。にもかかわらず、我々はエスニックグループの実在に関してはほとんど疑いを持たない。この実在性を支えている類似性はWittgenstein[2]が「家族的類似性family resemblance」と呼んだ「互いに重なり合ったり、交差し合ったりしている複雑な類似性の網目」であろう。エスニック集団はこのような「緩い」標識のもとで「境

界」の設定や「成員資格」の同定を行っていると考えられる。しかしこれらの問題は明らかに定義の問題を越えるために本論文では取り扱わない。

以上の前提のもとにエスニシティに関する諸理論を評価するための概念図式の提出を次章で取り上げたい。

2. 動員過程分析のための枠組み

本章では、まずDeutschの動員概念に着目し、動員の社会過程を考察する基本的着想を定式化したい。さらに、動員概念の下位類型として「階級的動員」と「エスニックな動員」を定式化し、動員概念の射程を広げることを試みる。最後に、R. Rudolpuh, R. Thompsonの図式を活用して動員の概念図式の定式化を行いたい。

2・1 「動員」概念と近代化理論

近代化の過程の分析に「動員（Mobilization）」概念を積極的に持ち込んだのはK. W. Deutsch[3]である。Deutschは、近代化とナショナリズムを広範な学際的視野から理解するための重要な概念として「動員概念」を用いており、諸個人や集団のアイデンティティという側面に引き寄せてみた場合のその含意は、『旧来の社会経済的心理的コミットメントの主要な部分が腐食し打破されて人々が新たな形態の社会化と行動様式をとりうるようになる過程』[4]と理解して差し支えない。分かりやすくいえば、「近代化」にともなう社会変動により過去の規範的秩序が崩れたとき、アノミー状態を避けるために人々が新たなアイデンティティと行動様式を獲得する過程を「動員」として概念化したのである。社会学の一般的定義では「動員」とはある社会的目的のために諸資源を投入する過程であるが、Deutschの場合は近代化によるアノミー状態（それは同時に諸個人のアイデンティティの危機でもある）の克服という具体的目的内容を持っていたといえる。この点は、エスニックな問題が優れて近代化の波に直面した当該個人のアイデンティティに関わる問題であることを考えると重要な指摘といえる。[5]

さらに、「動員」概念は優れて「政治」過程と深いつながりを持っている。産業化・近代化にともなう社会変動は、都市と農村の人口構成の変化や産業構成の変化など様々な社会的流動化と、その結果としての社会的格差を生み出してきた。そのため、個人のアイデンティティを担保してきた諸種の社会集団は流動化・分解を経て再編成を余儀なくされてくる。（エスニックな集団はその代表例の一つであり、近代化論の予想に反してこの種の集団が消滅しなかったことも周知の事実である。）このような危機的状況から生じる様々なニーズ（経済的利害調整から自分たちの地位に関する異議申し立てなど）をすくい上げ、社会的問題（issue）として議論の場に置き解決策を提示するのは優れて政治とそれが機能する一連の「政治過程」だからである。（尚、ここでいう「政治」とは、中央の行政府や立法府、政党だけでなく、地方議会や組合、政治的目的のためにリーダーシップをとる様々な集団や個人の活動の全般を指す。従

って、通常の「政治」という概念よりは広い概念である。）このような「動員」概念の性質から、本稿では「動員」概念全体を「政治的動員」と呼ぶことにする。また、具体的集団（政党・労組）の諸活動を（狭義の）政治的動員過程と呼ぶことにする。

Deutshのこの著作（"Nationalism and Social Communication (1953)"）は、近代化論に多大な影響を与え、いわゆる近代化論のルーツの一つとされるのが通説である。Deutsch自身は「動員」が必ずしも「同化」につながるものではないことを明言しているが、その後の「近代化論」の展開のなかでは「動員→同化」の図式が支配的になっていく。その背景には、Deutshの「動員」概念が近代化の趨勢を分析するための実証的分析概念であったものが、しだいに近代化論者の「願望」に適合するように解釈されてきたという事情がある。近代化論者全般の評価を行うことは本報告の目的ではないので、各論者の学説の展開についてはこれ以上立ち入らないが、「動員→同化」という図式を一旦はなれて「動員」概念の可能性を探る上でDeutshの定式化は今日でも再評価の余地があると考える。

2・2 「階級的動員」と「エスニックな動員」

近代化に伴う社会的再編成における「階級」の役割をもっとも強く主張したのはマルクス学派の階級社会論である。階級闘争とその帰結としての社会主義革命による統合というプランは今日では経験的に反証されたと見るべきだが、そこには近代における思考法の典型の一つを見ることができる。それは、経済＝市場における力関係によって規定される「階級（階層）」が社会編成の決定因であるという見方である。社会学における「階層」の一般的定義は、市場的「富」だけでなく「権力」「威信」「知識」などの社会的資源の多寡による位置づけをもとにしており、マルクス主義的な階級概念より多元化している。しかし、市場における規定力が大きなウエイトをしめることでは同様の判断にたち、実際に使用される場合はほぼ同様の傾向を持つといえる。このような、「階級」を基準とした社会的再編成＝「集団形成」への志向を「階級的動員」と呼ぼう。

階級的動員を特徴づけるためには、Parsonsのパターン変数の一つである「業績本位－属性本位」という変数が参考になる。この変数は社会的客体（行為相手）に対する志向性の基準を示すものであり、階級的動員が市場における達成度（獲得した地位）を基盤にしている点で、「業績本位」を志向する動員であることは確かであろう。一方、「属性本位」に基づく動員についてはどうであろうか。近代化の過程では「属性本位」に対する「業績本位」の優越が趨勢であり、「属性本位」に基づく動員は減少していくとされた。しかし、近代化の歩みはそう一元的なものではなく、エスニシティの活性化に見られるように属性本位の動員も依然として根強く見られる。（例えば、エスニシティだけでなく性別分業もまた性差（gender）にもとづく「属性本位」の分業である。）そこでは、言語をはじめとする民族文化などのいわゆる「エスニック」な要素を指標とした集団形成が動員の基準になっている。

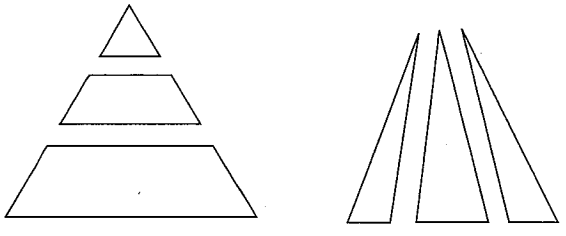
以上、「業績本位」－「属性本位」といったパターン変数により

「階級的動員」と「エスニックな動員」を特徴づけてみた。もちろん、「業績本位」－「属性本位」という概念図式自体が分析概念であり、現実には両者の要素が混在している場合が通常である。実際、エスニシティ問題は、文化などの集団の「属性」の問題と「階級（階層）」の問題とがオーバーラップした場合にしばしば登場する。[6] 梶田（1988, p.20）の簡便な図で示すとエスニック集団と階級（階層）との関係は下図のようになる。

図1で、左のようなケースを「水平的分業」と呼び、右のケースを「垂直的分業」と呼ぶ。（各ブロックはエスニックグループをさしている）

水平的分業の場合は、「社会階層とエスニック階層とは同義であり、例えばアメリカの黒人は下層階級というように、民族の分化がエスニック集団の分化と重なり合う」とされ。一方、垂直的分化の場合には、「すべてのエスニック集団が階級のヒエラルキーをもつ」とされる。[7]

（図1　水平的分業と垂直的分業）



実際に存在する社会は、『「水平的分化」と「垂直的分化」の中間に位置するが、そこには大なり小なり社会移動が存在し、しかもそれが、各エスニックグループごとに事実上不平等に存在していることから、完全な意味での「垂直的分化」とはならず「水平的分化」がかなり混入している。それゆえ、エスニシティ問題は、「民族対立」の問題であると同時に「階級対立」の問題でもあるわけである。』[8]

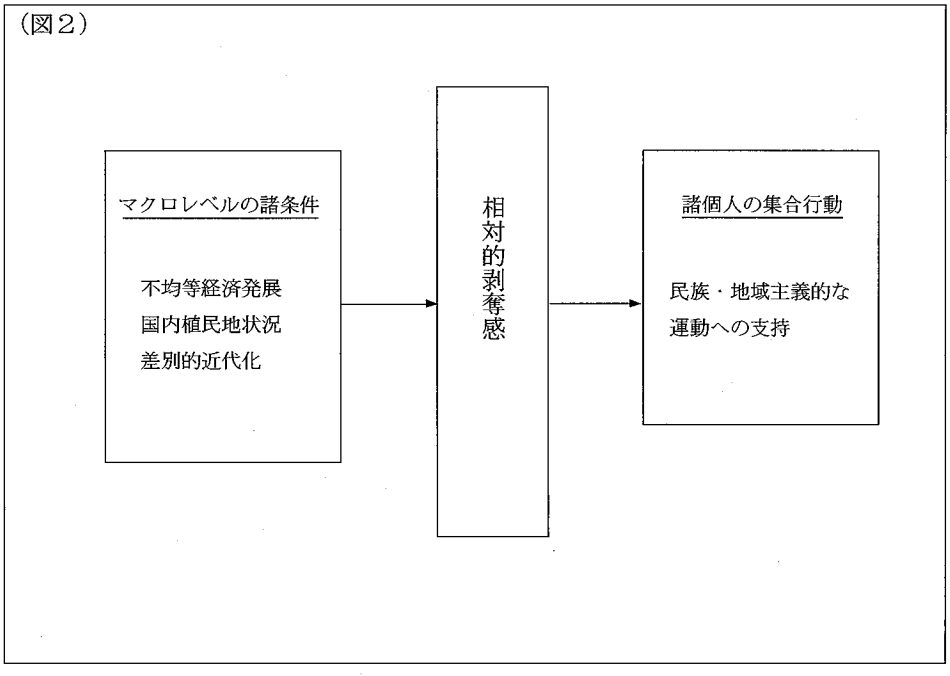
梶田の主張を本論文の課題に即して読み直すと、「エスニックな動員」と「階級的な動員」は別々に進行することはまれであり、互いに相互作用しながら進行していくものであり、その過程で相互の調整が失敗したとき「エスニックな問題」が前面にでてくるわけである。もちろん、実際のエスニシティの問題は事例毎に多様な変数を含んでおり、個々の事例の歴史的経緯も様々であるが、政治的動員の視点からエスニシティの問題を考察する本報告の目的からは「階級的動員」と「エスニックな動員」という二つの軸を提出することでひとまずの結論としたい。

2・3　政治的動員過程の枠組み

エスニシティに関する諸理論は、どういう過程を経てエスニシティの活性化が生じるかについてそれぞれの「仮説」や「前提」を持っている。本節では、前節の議論をもとに、それらの諸理論を評価・位置づけるための政治的動員過程の「枠組み」を考えてみたい。

議論の手始めとして、R. Rudolph, R. Thompson[9]による簡便な図式を導入したい。（図2－一部加筆）

（図２）



この図は、社会経済的要因を重視した初期のエスニシティ理論の論理構成の概略を示すために提出されたものであり、近代化・産業化に伴うエスニック集団間の社会的格差が下位集団の「相対的価値剥奪」の感覚を生み、それがエスニックな政治運動への支持（「エスニックな動員」）を生むとされている。

李光一[10]は、エスニックグループへの相対的価値剥奪感がいかに強くても、それらが自動的にエスニックな政治行動に結びつくわけではないと、この論理構成の不備を批判する。だが、その前にこの図式は元々の含意を越えて、エスニックな動員以外にも適用できることに注意しておこう。つまり、図2の右ボックスの諸個人の集合行動を「階級的政治運動への支持」と置き換えても十分にこの図式は成立するのである。

再び李の議論に戻ると、社会経済的変動の結果社会的格差が生じても、「当該のエスニック・グループ内に鬱積した相対的価値剥奪感を政治行動に連結（リンケージ）させる「作業」が一（たとえば、政治的リーダーによって）一行われなければ、エスニックな政治行動は生じないのである」[11]とされる。李のこの主張は、「動員過程」を優れて「政治的性格」を持つものと考える本論文の立場とも一致するものであり、妥当な指摘と思われる。なぜある「社会的格差」が「政治的問題」とされほかの「社会的格差」が問題とされないかということは、「社会的格差」の「発生原因」とは別に「政治過程」内部の独自の要因（エスニシティ問題では、民族・地域政党の戦略、政治的リーダーの存在）に左右されることが少なくない。少なくと

も中・短期的にはこうした「政治的要因」を抜きにしてエスニシティの活性化を論じることはできないだろう。この点を考慮して図2の修正を試みたのが図3である（李、ibid., p.126に加筆）。

（図3，政治的動員過程）

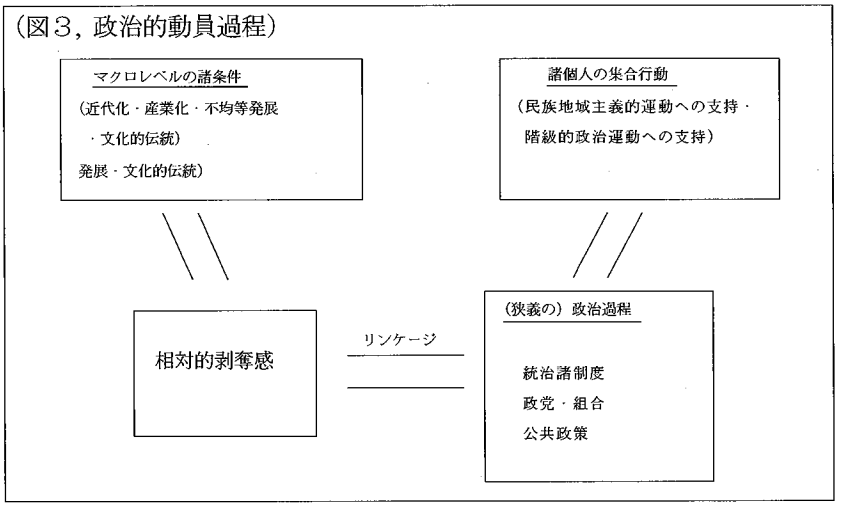


図3で付け加えたボックスで示される政治過程を「狭義の」政治的動員過程とし、図3全体で示される動員過程を単に「政治的動員過程」と呼んで区別しておく。この図3も「エスニックな動員」だけでなく「階級的動員」に適用可能である。各ボックスが示す領域の性格を確認しておくと、左上のボックスは「社会経済的・文化的」次元を示し、左下の「相対的価値剥奪感」が示すのは「社会心理的」次元である。その右の「（狭義の）政治過程」が示すのは「政治の制度的」次元であり、右上のボックスは諸個人のとる「政治的行動」の次元と見ることができる。図2は極めてラフなスケッチであるが、本論文で必要な「政治的動員過程」の枠組みを提出するという課題には一応の答えを与えるものである。

3．エスニシティに関する諸理論と動員過程

以上の議論をもとに、エスニシティに関する諸理論を再評価したい。ここで採り上げるのは、近代化論・民族支配論・民族競合論の3つの理論である。近代化論はエスニシティ固有の理論とはいえないが、現在においてもエスニシティに関する見方の一つを代表しており無視することはできない。民族支配論と民族競合論はエスニシティに関する「動員主義的アプローチ」を代表する理論であり、現在のところ最も有力な理論である。これらの理論を前述した「政治的動員」の観点から検討してみよう。

3・1　近代化論

近代化・産業化の進展につれて、動員は普遍主義的な業績原理に基づいてなされるようになり、属性主義に基づく動員は減少していくという立場であり、「1国内の文化と言語の究極的な融合と統一化を予想する」[12]ことから「同化主義学説（assimilationist approach）」とも呼ばれる。エスニック研究では「拡散・消滅モデル（diffusion-eraser perspective）」[13]、「発展的エスニシティ論（developmental ethnicity perspective）」[14]などとよばれるが本稿ではRagin[15]の用語法に統一して「発展論（developmental perspective）」と呼ぶ。

この立場では、近代化・産業化の進行につれて階級的動員が支配的となり、集団形成も階級的動員にそってなされるようになる。その際も、諸階級（階層）の分裂・対立よりは、連続体としての統合の側面が強調される。一方、エスニックな動員は、「持続的な相互的接触の不在（the absence of sustained mutual contact）」[16]による状況下で、発展地域と後進地域の境界がエスニックな境界と重なったとき、例外的・一時的に生じる現象と解される。従って、近代化に伴うコミュニケーションの増大によりエスニックな動員は自然に消滅するという楽観論を導くこととなる。図3の枠組みから近代化論の特質を見ると、産業化の不均等発展と不平等というマクロな要因が存在し、それがあるエスニックグループのなかで「相対的価値剥奪感」を引き起こしたとしても、近代化の進行に伴うコミュニケーションの増大による生活改善の期待が、それをすぐに解消してくれるとする。従って、エスニックなラインに沿った動員過程はそこで中断してしまう。（（狭義の）「政治過程」へのリンケージが行われず、政治的に中心的な問題とはされなくなる。）一方、階級的動員は不断に進行する。各階級（階層）は（主として）市場における経済的利害の対立を中心として互いを位置づける結果、どのグループもなにがしかの相対的価値剥奪感を持つが、労働組合や議会制民主主義に基づく政党政治を媒介として、自分たちの要求を政治過程に反映させようとして一定の成果をえる。近代化論はこうした階級的動員が極めて円滑に運ぶと仮定するので、各階級（階層）は同質的な国民文化を背景とした国民経済体系のなかで、連続的なハイアラーキーを形成するとするのである。

3・2　民族支配論

Hechterの“Internal Colonialism (1975)”に代表される立場で、「文化的分業論」、「国内植民地論」とも呼ばれる。本稿ではRagin (1987＝1993) に従い「民族支配論」と呼ぶことにする。次節で採り上げる「民族競合論」とともに「紛争的近代化論」の範疇に入れられる。

この立場によれば、エスニシティは近代化の過程で必然的に消え去るものではなく、（少なくともいくつかのエスニックな紐帯は）「組織化のための多大の努力を通じて維持されるもの」[17]であり、その意味で「一般的に、政治的動員（political mobilization）に関わる現象」[18]であるとされる。従って、エスニシティは個人にとって客観的

に存在するものというより、主観的に（一定の目的のために）「動員」される「道具的」存在とみなされる。

民族支配論の基本的ロジックは次の2点である。

（1）産業化に伴う不均等発展が作り出す、「中心」と「周辺」という二重構造。（「国内植民地論」）

（2）「中心－周辺」構造にエスニックな境界が重なる「文化的分業」のメカニズムの発生。

こうして、「国内植民地論」というマクロ的な要因に、「文化的分業」が生じることで「中心－周辺」構造が強化され、その反動として周辺部にエスニックな動員が生じるとされるのである。つまり、階級的不平等の克服としてエスニックな動員がなされるのである。

近代化論との比較でいうと、政治的動員の中にしめる階級の役割が減少し、（それを補う形で）エスニックな動員の役割が強調される。図3の図式に即していうと、階級的動員は、「中心－周辺」構造と「文化的分業」という状況に阻まれて不十分にしか進行せず、周辺マイノリティは自らの相対的剥奪感を十分には階級政治の過程に反映することができない。「中心－周辺」構造のもとにおいては労働組合も中心部の労働者の利益を優先するので、周辺労働者の階級意識は高揚しない。こうした階級的動員の行き詰まりを「補完」する形で、エスニックな動員が「周辺部」の剥奪感をバネにその解消を求めて「政治過程」へ流出する事になる。つまり、階級的動員とエスニックな動員は補完的な関係にあり、両者の複合作用としてエスニックな政治的アピールが強まるとするのである。

近代化論が『エスニックな動員が階級的動員に「代替」される』という構図をとるのに対し、民族支配論では、両者の間に「補完」関係を見ることでエスニックな運動の活性化を説明しようとしているのである。

3・3　民族競合論

民族支配論に対抗する形で、近年有力な理論として発展しつつあるのが「民族競合論」（Ragin.1987＝1993, 1979, Nielsen.1985）である。

この理論的立場は、民族支配論に見られた「動員」論的視角（エスニシティの主観性の強調、道具的存在としてのエスニックグループの把握）をさらに押し進めたものであり、希少な社会的資源（地位・役割）を諸エスニックグループが競合して獲得しようとすることから、エスニックな動員がなされるとする。その基本的前提としてRaginは次の2点を挙げている。[19]

（1）近代化は民族的差異を減少させる。

（2）近代化は大規模な民族的政治動員の可能性を増大させる。

一見相反するかに見えるこの二つの命題が、民族競合論におけるエスニックな動員の説明のロジックを形成している。

前者は、基本的には近代化論と同じ視点に立っており、近代化のプロセスは「エスニックな多様性の生態的土台を掘り崩し、小規模の生態的に境界づけられたエスニックなアイデンティティを浸食する」[20]とみなす。その結果、ある程度大きな規模のシステム（たとえ

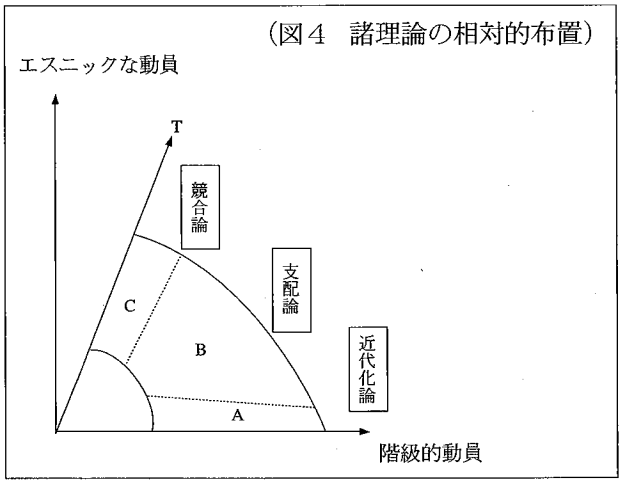
ば「国民国家」内での同質性（＝同化）が高まり、「文化的分業」は打ち破られ、人々の職業や教育機会などを求める競争が高まる。こうして周辺部の人々の同化がある程度進行すると、周辺集団は中央部の有力集団を準拠集団としてその地位への参入を計るのである。こうした競合状態が生じる場合、より広範囲に受容できる文化的アイデンティティを組織化したグループが競争の中で優位に立つため、アイデンティティ供与の「道具（tool）」として「エスニックな要素」が動員されるとするのである。

民族競合論の民族支配論との違いは「文化的分業」への評価の違いに表れる。民族競合論では、近代化とそれに伴うある程度の同化の進行をエスニックな動員のチャンスの増大の前提とするため、文化的分業が崩れたときに社会的流動性が増大し、エスニックグループの活性化の可能性が生まれるとする。このような背景には、階級並びに階級的動員に対するより厳しい見方がある。民族支配論が階級とエスニシティの補完的関係を強調したのに対して、民族競合論では、脱工業化社会では労働組合などの階級的運動はきわめて限定的な役割しか果たさず集団形成や資源配分の主流の基準たりえないとし、『エスニックな動員が階級的動員を代替する』形で（「近代化」論とは逆の方向）進行するという判断がある。図2の概念図式でいうと、マクロレベルの諸条件から（狭義の）政治過程までのプロセスに沿っては階級的動員は円滑に運ぶが、（狭義の）政治過程においてはエスニックな動員が階級的動員に代替する形で進行すると考えるのである。

4. 結論

以上見てきたように、近代化論・民族支配論・民族競合論では、それぞれの理論的な前提の違いから、近代化の進行のエスニックグループに対する影響に関する評価やエスニックな動員と階級的動員にたいする重点の置き方と相互関係の性質（「補完」的関係か、「代替」的関係か）が異なってくる。その関係を示したのが図4である。

（図4　諸理論の相対的布置）



縦軸（Y軸）はエスニックな動員の量、横軸（X軸）は階級的動員の量を表す。従ってX－Y平面上の各点は分析的に構成された社会状態を指すことになる。原点からの距離は（合成された）「動員」の総量を表す。近代化は動員が増大する過程であるから、原点から遠ざかる方向性をもち、ある程度の動員の進行が近代化を表す（内側の円弧の外側がそれにあたる）。しかしながら、社会的統合が維持されるには、動員の総量は、それを越えると社会的解体をもたらすような一定の限界値を持つと想定される。（それを示すのが外側の円弧であり、その外側は社会的な解体を表す）。さらに、近代社会では階級的動員が完全にエスニックな動員に代替されるとは考えにくいので原点から引いた直線Tより上側の領域は可能な社会状態ではないと考えられる。従って、二つの円弧と直線TおよびX軸に囲まれた領域が可能な動員の範囲である。今まで述べてきたように、近代化論では階級的動員がエスニックな動員を代替するために、近代化論が想定する社会は図4では一番下側（領域A）に位置することになる。民族支配論は階級的動員とエスニックな動員が補完的関係にあると考えるので一方が他方に取って代わるという代替関係は成立しにくい。従って、階級的動員とエスニックな動員の比率は極端に高くなったり低くなったりするとは考えられない。そのため図4では領域Bが民族支配論が想定する社会状態と考えられる。民族競合論では、エスニックな動員が階級的動員を代替するため、エスニックな動員は民族支配論に比べれば優越する傾向がある。従って、民族競合論が表す社会状態は図4では一番上の領域Cにあたる。

もちろん、図4の図式は比較のために各理論の特徴を階級的動員とエスニックな動員という二つの軸に沿って分析的に取り出したものであり、その限りでは最単純なモデル図式である。従って、実在の社会にそのまま当てはめるわけにはいかない。また、この分析は静学的分析であり、このような社会空間をある社会がどのような径路を経て進むかに関しては動学的な分析に拡張される必要がある。しかしながら、エスニシティに関する諸理論の相対的な位置づけをはかるという本論文の目的のためには一応の回答を与えるものである。

注

（1）Isajiw, W. W. 1974 "Definition of Ethnicity" *Ethnicity* 1(2), pp.11-124

（2）Wittgenstein, Ludwig (1953), Philosophische Untersuchungen. Basil Blackwell,（藤本隆志訳、一九七六『哲学探究』、大修館書店、六九－七一頁）

（3）Deutsch, Karl W. 1953, Natiolism and Social Communication. The technology Press of The Massachusetts Institute of Technology and John Wiley & Son's, Inc., New York

（4）藪野祐三　一九八二　『近代化論の方法』　一五四－一二三頁

（5）E. H. Eriksonがidentity概念を提唱し始めたのは、一九五九年に出版されたIdentity and The Life Cycleからである。Deutchが一九五三年の時点でIdentity概念を考慮に入れていたことは注目に値する。

（6）梶田孝道　一九八八　『エスニシティと社会変動』、一九頁

(7) ibid., p.19-20

(8) ibid., p.20

(9) Rudolph, J. R. and Thompson, R. J. 1989, "The Ebb and Flow of Ethnoterritorial Politics in the Western World", in R udolph, J. R. and Thompson, R. J. (eds.) *Ethnoterritorial Politics, Policy and the Western World,* Boulder. p.5

(10) 李光一 一九九三 「エスノポリティクス復興の政治的文脈」『政治空間の変容』:岩波講座 社会科学の方法Ⅳ, 岩波書店, 一二九頁

(11) 李, ibid., p.126

(12) 関根政美 一九九四 『エスニシティの政治社会学』, 名古屋大学出版会, 五四頁

(13) Nielsen, F, 1985 "Toward a theory of ethnic solidarity in modern societies." *American Sociological Review,.50.* p.132

(14) Leifer, Eric. M. 1981 "Competeing models of political mobilization: the role of ethnic ties" *American Journal of Sociology*, 87, No.1. p.24

(15) Ragin, Charles 1987 The Comparative *Method,* Universal of California Press,=1993. 鹿又伸夫(監訳)『社会科学における比較研究』, ミネルヴァ書房, 一八八頁

(16) Hechter, Michael. 1975 *Internal colonialism: The Celtic Fringe in British National Development, 1536-1966,* London: Loutledge & Kegan Paul. P.25

(17) Hechter, ibid. p.314

(18) Hechter, ibid. p.314-315

(19) Ragin, Charles,. 1979 "Ethnic Political Mobilization: The Welsh Case." *American Sociological Review*.44. p.622-623

(20) ibid. p.623

Ethnicity theories in view of mobilization

Makoto SAKURAMA

For modern nation states, ethnicity is not a phenomenon that is exceptionally occurred but one which is to be explained as a "modern phenomenon" . In this article, the concept of "mobilization" advocated by K.W.Deutch is used to reassess the theories based on "mobilization approaches" that is "reactive ethnic model" and "ethnic resources competition model" included "developmental ethnicity model".

The concepts of "class mobilization" and "ethnic mobilization" can be introduced to construct the analysis scheme which shows the process where mobilization resources is vitalized.

In conclusion, to use this scheme, these models are located and interpreted in the more general framework.

Key Words

ethnicity, mobilization, developmental ethnicity model, reactive ethnicmodel, ethnic resources competition perspective